

災害の自分事化プロジェクトと 流域治水ロゴマークの決定について

国土交通省 水管理・国土保全局
令和6年3月19日

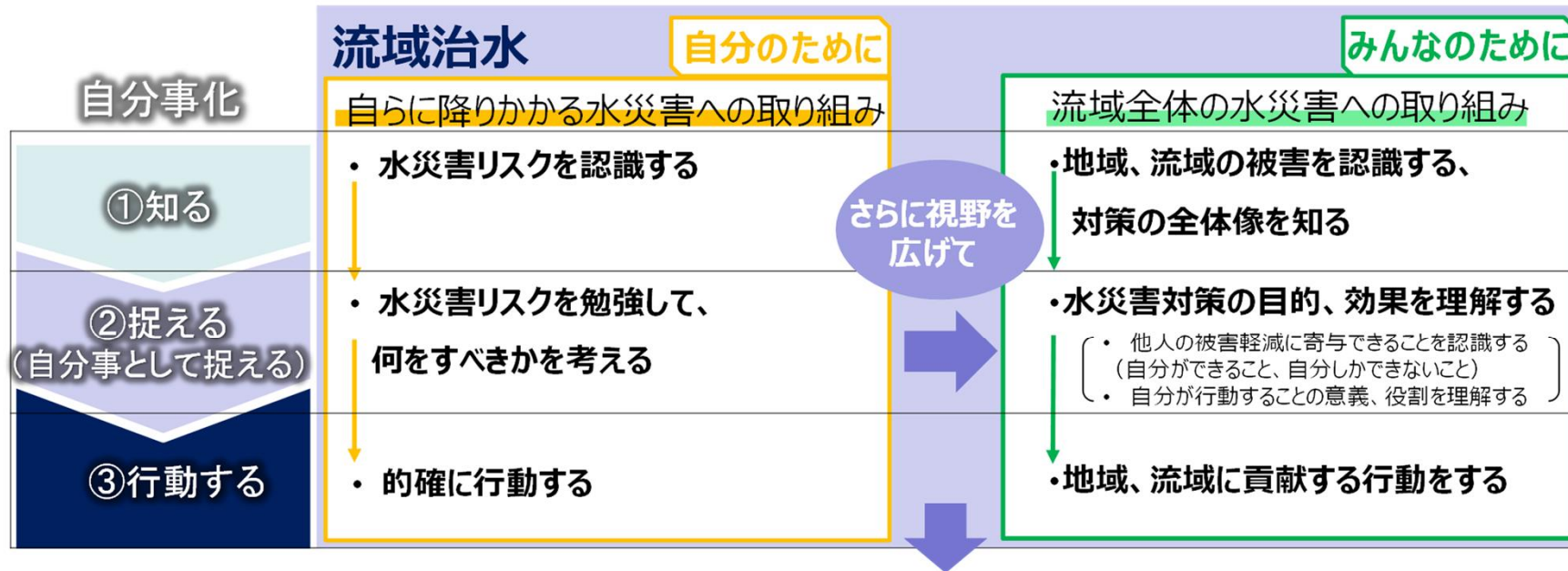
1. 流域治水推進上の背景・課題

水災害リスクの自分事化

住民や企業などが自らの水災害リスクを認識し、
自分事として捉え主体的に行動する。

流域全体の水災害への取り組みへ

水災害から自身を守ることからさらに視野を広げて、地域、
流域の被害や水災害対策の全体像を認識し、自らの行動を深
化させることで、流域治水の取り組みを推進する。



持続的な発展、ウェルビーイング

水災害のリスクを知り、行動につなげていく上では、
それを自分のこととして捉える「自分事」が課題。

さらにその視野を流域に広げ、流域治水に取り組む主体を増や
していくことが重要。



検討会を設置して議論、とりまとめ

2. 検討会概要、自分事化の取組方針

水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会

- 第1回 令和5年4月28日 ……水災害リスクの自分事化に向けた論点整理
- 第2回 令和5年5月25日 ……各地における取組事例の紹介（委員から7事例）
- 第3回 令和5年6月19日 ……とりまとめ議論
- 令和5年8月30日 ……とりまとめ公表（報道発表）

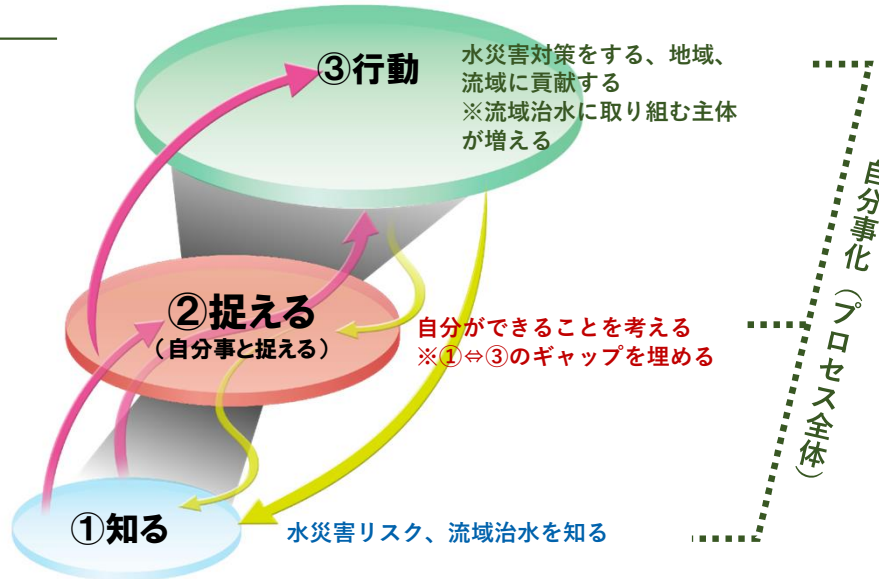


委員（敬称略、五十音順）

自分事化の取組方針

取り組みの例

- ・要件化・基準化
- ・トップランナーの育成
- ・流域治水への貢献
- ・ビジネスへの支援
- ・流域対策への支援
- ・取り組み、効果の見える化
- ・連携活動
- ・教育活動
- ・流域治水の広報
- ・リスク情報等の提供



大局的には①知る→②捉える(自分事と捉える)→③行動の流れを作り、取り組みの幅を広げ、トップランナー育成や要件化・基準化等を通して流域にも視野を広げていく。

そして、意識の醸成を図り、流域治水を国民運動、日本の文化に（目指すところ）

日々の生活の中で水害、防災のことが意識され、全国的に水災害リスクの自分事化が図られ、その視野が流域に広がり、社会全体が防災減災の質を高めるとともに、持続的に発展していく。

- | | |
|--------|-----------------------------------|
| 伊東 香織 | 岡山県 倉敷市長 |
| 今若 靖男 | 全国地方新聞社連合会 会長（山陰中央新報社 取締役東京支社長） |
| 加藤 孝明 | 東京大学生産技術研究所 教授 |
| ○小池 俊雄 | 国立研究開発法人土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター長 |
| 河野 まゆ子 | 株式会社 JTB 総合研究所 執行役員 地域交流共創部長 |
| 指出 一正 | 株式会社 sotokoto online 代表取締役 |
| 佐藤 健司 | 東京海上日動火災保険株式会社 公務開発部 次長 |
| 佐藤 翔輔 | 東北大学災害科学国際研究所 准教授 |
| 下道 衛 | 野村不動産投資顧問株式会社 執行役員 運用企画部長 |
| 知花 武佳 | 政策研究大学院大学 教授 |
| 中村 公人 | 京都大学大学院農学研究科地域環境科学専攻 教授 |
| 松本 真由美 | 東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 客員准教授 |
| 矢守 克也 | 京都大学防災研究所 教授 |
| 吉田 丈人 | 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授 |
| ※○委員長 | |

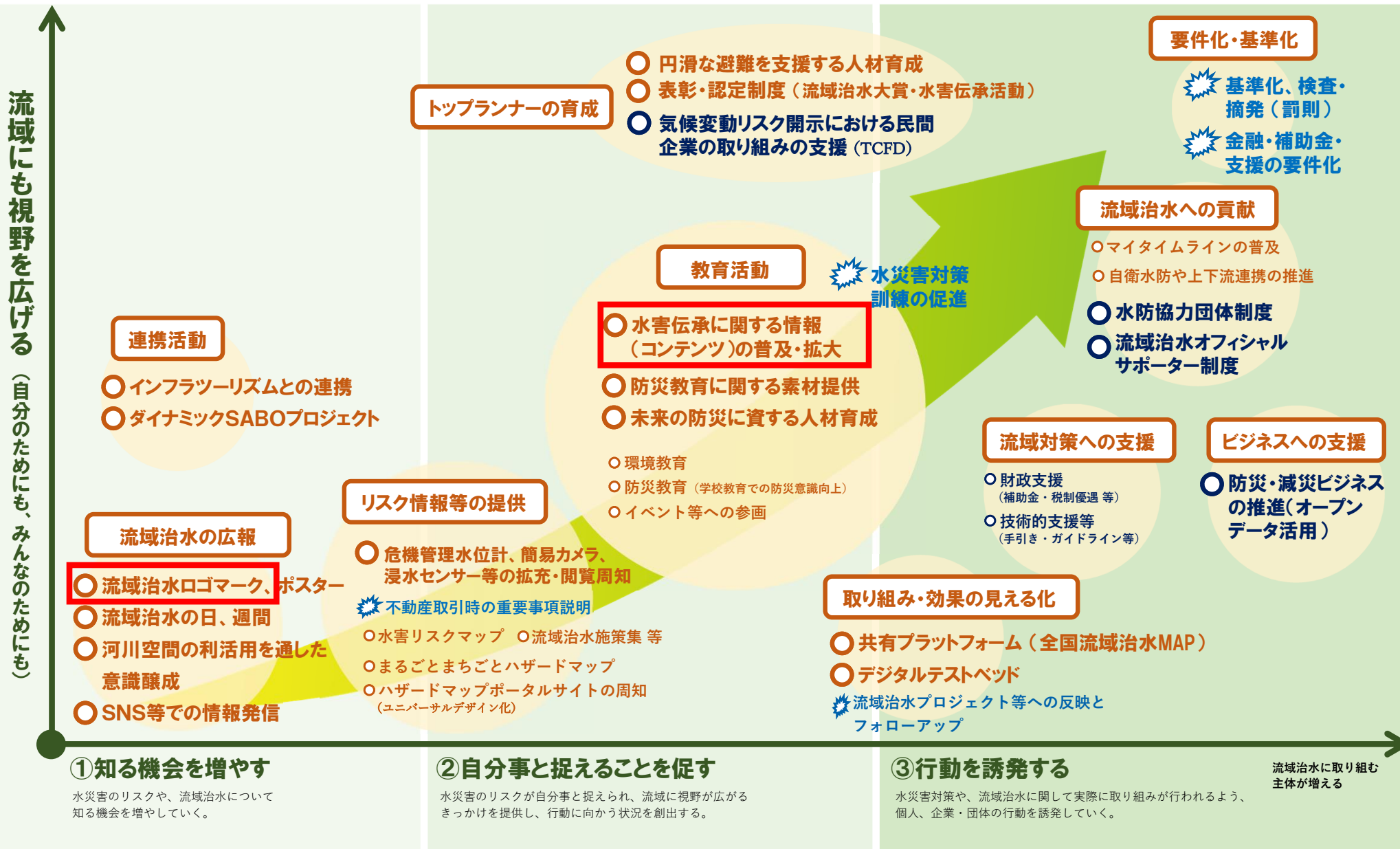
3. 施策体系

細字：既存施策
太字：新規施策

○ 自発的な取り組みを促す施策

○ 特に企業を対象とした施策

★ 一定の強制力を伴う施策



具体的な取組

- 水害伝承に関する良質な情報の普及・拡大
- 流域治水ロゴマーク

水害伝承に関する良質な情報の普及・拡大

水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会 (令和5年4月～6月)

「水災害を自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす～総力戦の流域治水をめざして～」を公表 (令和5年8月)

「災害の自分事化協議会」(JICE:国土技術研究センター)(令和5年9月～12月)

水害伝承に関する良質な情報(コンテンツ[※])の普及・拡大 「災害の自分事化プロジェクト」

※コンテンツ; Web、冊子、展示施設等

※活動; 語り部、祭り、災害伝承に係る施設等の周遊ツアー等

【委員】 ◎会長

- ◎ 今村文彦 (東北大学災害科学国際研究所 教授)
- 大知久一 (一社 日本損害保険協会 専務理事)
- 岡村啓太郎 (全国地方新聞社連合会 会長)
- 笹原克夫 (高知大学教育学部 教授)
- 佐藤翔輔 (東北大学災害科学国際研究所 准教授)
- 所澤新一郎 (一社 共同通信社 気象・災害取材チーム長)
- 徳山日出男 (一財 国土技術研究センター 理事長)
- 針原陽子 (読売新聞東京本社 防災ニッポン編集長)
- 廣瀬昌由 (水管理国土保全局 局長)

【プロジェクトのミッション】

- 1) 心を揺さぶり行動に誘う良質な情報の発掘・育成
 - ▶ 認定制度
- 2) 情報を伝える仕組みの展開・普及
 - ▶ お祭り、旅行、学校教育、保険加入

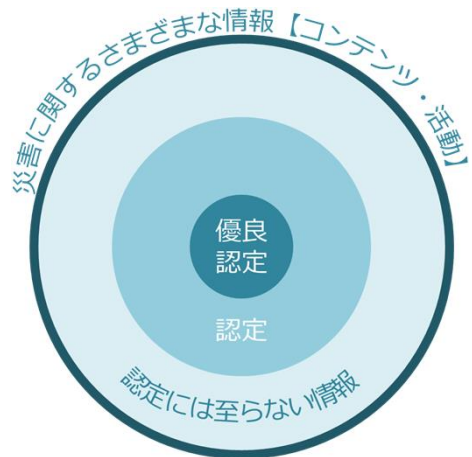
【プロジェクトのゴール】

過去の災害の事実と教訓を伝承するコンテンツ及び活動等を通して、人々が良質な情報に接触することによって、災害を自分事化して、「命を守る」「生活を守る」「早く回復する」ことを目的とした新たな行動をとること(行動変容)と位置づける。新たな行動とは、「平時から備えること」「避難すること」を言う。

(仮称) 災害の自分事化プロジェクト

■ 認定の考え方、有効期間

- コンテンツについては、評価項目を基に「優良認定」と「認定」の二段階を設定。
- 「優良認定」、「認定」それぞれの案件に4年の有効期間を設け、当該期間内において評価項目の充実に向けた取り組みに関する審査、確認を踏まえて、有効期間の更新を決定。



優良認定、認定される良質な情報のイメージ図 (案)

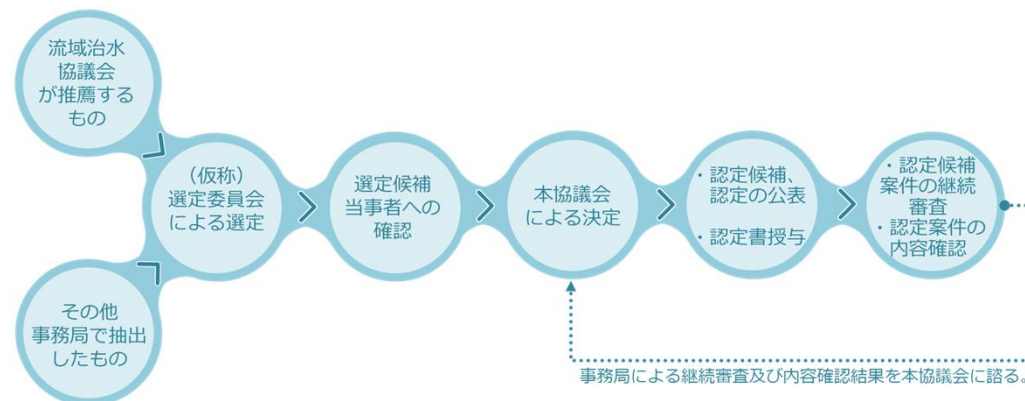
■ 認定プロセス

- 流域治水協議会が推薦するもの及び事務局が抽出するものを対象に、「(仮称) 選定委員会」が「優良認定」、「認定」案件を選定し、「災害の自分事化協議会」が決定。

■ 評価項目

- 認定候補、認定は4つの評価項目を基に行う。

- 1 【事実】**
災害に関する事実など基本的な情報を含むもの
 - 事実関係が正確に伝えられているもの (気象、被害、救命・救急活動、復旧・復興等に関する事項)
- 2 【リアリティー】**
行動をおこす動機付けにつながる内容を有するもの
 - 写真、動画、被災した品々、遺構、災害経験者による手記 等
 - 災害経験者による当時の実体験を踏まえた証言 (語り部)、解説 等
- 3 【教訓】**
知識や教訓が存在し、備えにつながるもの
 - 命・財産を守る、避難生活、復興に備えるための対処法が示されているもの
 - 災害時の人々の行動から紐解かれる現在にも有効な教訓があるもの
- 4 【深化】**
深い学びや行動に結び付く手がかりがあるもの
 - 他の災害伝承に係る活動、災害伝承に関する周遊ツアー、語り部による活動、防災教育活動等の情報が得られるもの
 - 平時の生活、日常の行動等の中で防災に結び付く仕組みになっているもの
 - 情報の質的向上・充実、継続性確保の為の取り組みがなされているもの



認定プロセスのイメージ図 (案)

(仮称) 災害の自分事化プロジェクト

事例 えちごせきかわ 大したもん蛇まつり

【新潟県関川町】

- 羽越水害（1967（昭和42）年8月28日）により、関川では死者・行方不明者34名が犠牲。
- 羽越水害後20年を契機に始まった、村の大蛇伝説と交え、水害を伝承する祭。
- 水害発生日の数字に合わせ、82.8mの大蛇を竹と藁で作成し、町内を練り歩く。

※佐藤翔輔 東北大学 災害科学国際研究所 准教授
による研究成果

- 4人に3人は、羽越水害発生日を知っており、大蛇の長さが影響していると考えられる。
- 祭りによく参加している人が、災害に対してよく備えを行っている。但し、水害の伝承や家族と話し合うことの方がより、関係している。
- 祭りは防災行動に直接作用せず、祭りの参加は災害の記憶を醸成し、記憶が住民の防災行動に影響している。

【出典：佐藤翔輔，流域治水に関する事例報告，国土交通省「水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会」第2回検討会資料（原典：佐藤翔輔(2020): 1967年羽越水害の伝承手法としての「えちごせきかわ大したもん蛇まつり」の成立・継続・効果に関する調査・考察，自然災害科学，Vol. 39, No. 2, pp. 157-174(ほか2編)】

2001
ギネス
認定
長い蛇
世界一

第33回
えちごせきかわ
大したもん蛇まつり
2023

8/27日 垂水の里
9時30分
スタート

8/25 安全祈願祭
【17:30～】 蛇喰おりの碑

8/26 花火大会
【19:00～】 高瀬温泉周辺

8/27 大蛇パレード
【9:30～12:00頃】

◆大蛇パレードコース

START 垂水の里

高瀬温泉
ケアハウス前
上関本村内
「道の駅」関川

GOAL ゆ〜む前

8/26 花火大会

大蛇担ぎ
募集中!!

お問い合わせ 関川村役場地域政策課 ☎0254(64)1478 関川村HP <http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/>

【今年度のポスター】

【出典； <http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/tourism/209/index.html>】

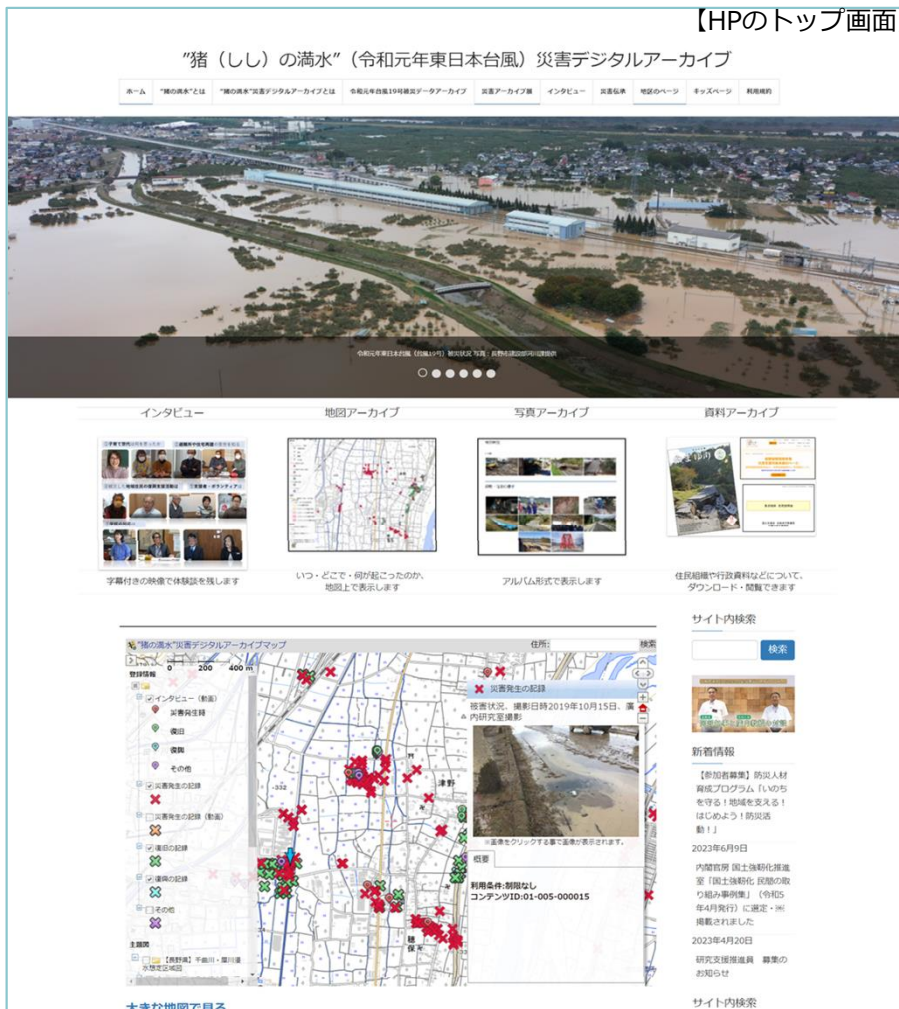
(仮称) 災害の自分事化プロジェクト

事例 “猪(しし)の満水”災害デジタルアーカイブ 【長野県長野市】

長野県では、寛保2年(1742年、戌年)の洪水被害を「戌の満水(いぬのまんすい)」と呼び、伝承されている。

令和元(2019)年の洪水は、それに匹敵する被害を受けたこと、令和元年が亥=猪年であったことから、「猪の満水(ししのまんすい)」と呼んでいる。

【HPのトップ画面】



<工夫されていると思われるポイント>

- 被災地での被災者の肉声による証言視覚、聴覚の両面からの効果的な意識への働きかけ。
- 地図の利用による、災害に関する事実の正確かつ分かり易い表現。
- ハザードマップとの組み合わせによる、深い学びへ誘う手がかりの提供。

流域治水ロゴマーク選定結果

公募期間 : 令和5年12月21日～令和6年1月22日
応募数 : 32作品 (22名)
審査委員会 : 令和6年2月15日開催

選定作品、説明



流域治水

グレースケール



箔押し、エンボス加工用1色データ



審査委員



上田 社一 委員
 一般社団法人Think the Earth理事



指出一正 委員
 株式会社ソトコト・オンライン代表取締役



吉高まり 委員
 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社フェロー (サステナビリティ)

デザインメッセージ

日本はどこに行っても川があり、水に囲まれています。資源でもあります、災害も引き起こす川と共存して行かなければなりません。

中央の図形は、多様な地域同士が行政界を超えて流域で連携していくイメージを重ねて表現しています。その周囲を囲むような円は、水災害対策により流域を守っていくことを、円の端の手は、このような対策は長年多くの人の手により進められてきたことや、これからも地域同士、住民同士が手を取り合って水災害に立ち向かっていこうという意志を表したものです。

また、さまざまな水滴の円は、協働して水害に対して備えていく国、自治体、団体、住民を表しています。

使用シーン

例：各取組主体が作成するパンフレット、ポスター、説明資料、プレスリリース、名刺、看板、展示物、ウェブサイト、SNS、広報物、各種案内 等

リーフレット (表紙) での使用例



名刺での使用例



ウェブサイトでの使用例

